

2015年度
日米知識人交流事業
U.S.-Japan
Public Intellectuals Network



2015年10月18日～10月23日

デヴィッド・ハリス氏
米国ユダヤ人協会理事長

October 18 – October 23, 2015

Mr. David Harris
Executive Director of the American Jewish Committee

[京都講演会]

「ユダヤ系アメリカ人からみたアメリカ・中東・世界情勢」

開催日：2015年10月19日 会場：同志社大学

[Public Lecture in Kyoto]

“The U.S., Middle East, and the World: An American Jewish Perspective”

Date: October 19, 2015 Venue: Doshisha University

[東京講演会]

「ユダヤ系アメリカ人からみたアメリカの政治・社会・大統領選挙」

開催日：2015年10月21日 会場：東京大学

[Public Lecture in Tokyo]

“Politics, Society, and Presidential Campaign in the U.S.:
An American Jewish Perspective”

Date: October 21, 2015 Venue: The University of Tokyo

日米知識人交流事業

日米センター（CGP）は平成27年度より米国の多様な知的コミュニティのリーダーを日本に招聘し、日米知識人のネットワークを形成する交流事業を実施しています。参加者は、日本の研究者、政策実務家、市民セクターのリーダーなどとの対話や、公開講演会を行います。

U.S.-Japan Public Intellectuals Network Program

The Center for Global Partnership (CGP) has implemented the exchange program that invites intellectual leaders from diverse communities in the United States in order to promote the networking of intellectuals in both countries since 2015. The invited leaders engage in dialogues with Japanese researchers, policy practitioners and leaders of the civil society, and hold public lectures in Japan.

挨拶 Remarks

茶野 純一（国際交流基金日米センター所長）



日米センターは国際社会が直面する重要な共通課題を解決するため、日米両国が世界の人々とともに知恵を出し合い、協力していく必要があるという考えから、1991年に国際交流基金の中に設立されました。外交、安全保障、国際経済の分野を中心に、現代社会が直面する様々

な政策的課題について、日米双方の知的コミュニティ協力、協働によるアイデア交換を進め、その解決に向けた専門家同士の研究対話を支援するとともに、政策志向型フェロシップを通じた研究者支援や、日米双方の相手国理解の深化、拡大に向けた公開セミナーなどを通じて日米関係の緊密化に取り組んでいます。

このたび、米国との知的交流、対米理解の促進という観点から、米国において最も有力なアドボカシー団体の一つである米国ユダヤ人協会（AJC）のデヴィッド・ハリス理事長を日本に招へい致しました。今回の講演会では、多様なエスニック・コミュニティが織りなす米国政治文化におけるユダヤ系米国人の位置と役割、米国の外交政策への働きかけ、人権、国際テロ、核の不拡散や安全保障などの世界的課題に対するユダヤ系米国人の対応等について、ハリス氏より示唆に富むお話をいただきました。

京都の講演会開催では、同志社大学の一神教学際研究センター、アメリカ研究所、神学部・神学研究科の御関係者の皆様、また東京の講演会開催では、アメリカ政治研究会、東京大学の久保文明研究室、東京大学ビジネス・ロー比較法政研究センターの御関係者の皆様より大変なご尽力をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

Junichi Chano (Executive Director,

The Japan Foundation Center for Global Partnership)

The Center for Global Partnership was established within the Japan Foundation in 1991 to promote collaboration between the people of Japan, the United States, and beyond, in order to address issues of global concerns.

We are working to build stronger and closer ties between Japan and the United States through supporting research and dialogue between the two countries aimed at resolving a wide range of policy issues that modern societies face with an emphasis on the fields of foreign policy, national security and international economics, developing human resources through fellowship programs centering on policy research, and working to further increase interest in Japan among Americans by holding open symposiums and public seminars.

As part of our effort to promote intellectual exchange and enhance understanding of American affairs, we invited Mr. David Harris, Executive Director of American Jewish Committee (AJC). AJC is one of the most prominent advocacy organizations in the United States. At the public lectures held in Kyoto and Tokyo, he made suggestive discussions on the role of the American Jewish community in the U.S. politics and culture that consist of diverse ethnic backgrounds, the influence of the American Jewish community in complex public debate about U.S. foreign policy, and views of Jewish Americans on global issues such as human rights, international terrorism, nuclear non-proliferation and national security.

I would like to express my appreciation to Doshisha University, particularly to Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religion (CISMOR), the International Institute of American Studies, and School of Theology, and to the University of Tokyo as well, particularly to Institute of Business Law and Comparative Law and Politics of Graduate Schools for Law and Politics, Dr. Fumiaki Kubo's office at the Faculty of Law, and to Study Group in American Politics, for their cooperation in hosting the lectures on their campuses.

デヴィッド・ハリス

(米国ユダヤ人協会理事長)



1906年よりユダヤ人のアドボカシーをグローバルに主導してきた米国ユダヤ人協会(AJC)において、1990年より理事長を務める。ダボス会議、国連人権委員会、米国議会をはじめ世界各国で講演、証言活動を積極的に行う。人権擁護や

ユダヤ人に対する国際的な献身の功績が各国政府に認められ、10か国(アゼルバイジャン・ベルギー・ブルガリア・フランス・ドイツ・イタリア・ラトビア・ポーランド・スペイン・ウクライナ)より計14回表彰を受ける。CBSラジオへの出演や、ハフィントン・ポストなど各種メディアへの寄稿も多い。ジョンズ・ホプキンス大学ポール・H・ニツツェ高等国際関係大学院客員研究員、オックスフォード大学セント・アントニーカレッジシニア・アソシエートを歴任。ヘブライ大学名誉博士。著書に、*The Jewish World, Entering a New Culture* などがある。

David Harris

(Edward and Sandra Meyer Office of the Executive Director, American Jewish Committee)

Mr. Harris has led AJC, the premier global advocacy organization, since 1990. He has been invited to speak at some of the world's most prestigious forums, including the World Economic Forum in Davos. He has testified before the U.S. Congress on several occasions, as well as before the UN Commission on Human Rights. He has been honored a total of 14 times by the 10 governments for his international efforts in defense of human rights, advancement of the transatlantic partnership, and dedication to the Jewish people. He has written hundreds of articles, op-eds, letters, and reviews in leading media outlets, including CBS Radio Network and *The Huffington Post*. He was a Visiting Scholar at the John Hopkins University School of Advanced International Studies (2000-2002) and a Senior Associate at St. Antony's College of Oxford University (2009-2011). In 2003, he was awarded an honorary doctorate by Hebrew Union College. Mr. Harris is the author of seven books including *The Jewish World, Entering a New Culture*, and five volumes of *In the Trenches* – and co-author of an eighth, *The Jokes of Oppression*.

AJC Global Jewish Advocacy

米国ユダヤ人協会

米国ユダヤ人協会は1906年11月11日に設立されたユダヤ民族アドボカシー団体で、その種として米国では最も古い団体の一つ。ユダヤ人の宗教の権利、市民権を推進することが主要な活動内容。AJCは、米国に22の地域事務所及び9つの海外事務所があり、また世界中に31のユダヤ系共同体組織との国際パートナーシップを結んでいる。

米国ユダヤ人協会アジア太平洋研究所

AJCのアジア太平洋研究所(API)はニューヨークに本部があり、ワシントンD.C.、インド、日本、東南アジアに代表事務所を持つ。APIは東南アジアおよび米国における政府関係者や、市民社会、メディア、ビジネスリーダーに働きかけ、ユダヤ人やイスラエルに対しての意識を高め、政治的提携、経済的協力、相互利益に関わる問題の対話を進める活動を支援している。

American Jewish Committee (AJC)

American Jewish Committee (AJC), established in 1906, is one of the oldest Jewish advocacy organizations in the United States. Its key areas of focus are to promote religious and civil rights for Jews internationally. The organization has 22 regional offices in the United States, 9 overseas offices, and 31 international partnerships with Jewish communal institutions around the world.

AJC Asia Pacific Institute

AJC's Asia Pacific Institute (API) is based in New York, with representation in Washington, D.C., India, Japan, and Southeast Asia. API works on influential government, civil society, media, and business leaders in the Asia-Pacific region and in the U.S., raising awareness about the Jewish people and Israel, and fostering favorable political alliances, economic links, and dialogue on issues of mutual interest.

「ユダヤ系アメリカ人からみたアメリカ・中東・世界情勢」

- 講師： デヴィッド・ハリス AJC 理事長
- 日時： 2015年10月19日（月曜日）16時40分～18時15分
- 会場： 同志社大学今出川キャンパス 同志社礼拝堂
- 主催： 国際交流基金日米センター（CGP）
米国ユダヤ人協会（AJC）
同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
同志社大学アメリカ研究所
- 共催： 同志社大学神学部・神学研究科
- 主催者挨拶： 村田晃嗣（同志社大学学長）
四戸潤弥（同志社大学一神教学際研究センター センター長）
茶野純一（国際交流基金日米センター所長）

モデレーター：杉田弘毅（共同通信社 編集委員室長）



一橋大学法学部卒業後、共同通信社入社（1980年）。テヘラン支局長（1991年～1992年）、ニューヨーク特派員（1993年～1996年）、ワシントン特派員（1997年～2001年）、外信部副部長（2004年～2005年）、ワシントン支局長（2005年～2009年）、編集委員兼論説委員（2010年～2013年）などを歴任、2013年から現職。

日本記者クラブ企画委員、早稲田大学アジア太平洋研究センター特別研究員、中央大学総合政策文化研究所客員研究員、法政大学沖縄文化研究所研究員。

著書に「検証 非核の選択」（岩波書店2005年）、「さまよえる日本」（生産性出版2008年）、「アメリカはなぜ変わるのか」（筑摩新書2009年）、編著に「世界が日本のことを考えている」（太郎次社エディタス2012年）、監訳「新大陸主義」（潮出版2013年）など。



村田晃嗣（同志社大学学長）



四戸潤弥氏より記念状贈呈

デヴィッド・ハリス氏の講演要旨

ユダヤ人の歴史と AJC のミッション

ハリス：こんにちは。同志社大学にお招き頂き大変光栄に思います。村田学長の温かなおもてなし、それに米国ユダヤ人協会（AJC）と協力して下さった国際交流基金の皆様に感謝いたします。

私が今日 AJC を代表してここにいるのは、3 人の人物のおかげです。1 人目は父です。父は両親とともにベルリンに移住し、13 歳だった 1933 年にアドルフ・ヒトラーが総統になりました。以後終戦まで父はオーストリア、フランスで難民となり、フランス外人部隊の兵士として戦った後、ナチス傀儡ヴィシー政権の収容所で 3 年間炭鉱夫として働きました。父は収容所から逃亡し、戦争最後の 2 年間は米国中央情報局（CIA）の前身である戦略情報局（OSS）のため働きました。その縁で戦後は米国に渡りました。父は自分のことをほとんど話しませんでした。私はこう問いました。「父は一体どんな悪いことをして、迫害と恐怖、収監、逃亡に耐え、勇気ある 12 年を過ごす羽目になったのか」と。むろんその答えは、彼がユダヤ人だったからです。

私がここにいるのは、1923 年にモスクワで生れたある女性のおかげでもあります。彼女と家族は 1929 年には、スターリン政権時代の最後の合法移民としてパリにたどり着き、大勢の他の移民と合流しました。1940 年にナチスがほぼフランス全土に侵攻するまで、一家は不自由なく暮らしていました。その後は多くの人と同様、パリを離れて南へ向かい、17 カ月間ユダヤ人を探すナチスやヴィシー政権の協力者から逃れ続けました。私は再びこう自問しました。「単にユダヤ人という理由で彼らをつけ狙い迫害し、時に殺してしまえる人間の本性とは何なのか」と。

私をここに導いた 3 人目の人物は、1951 年にリビアのトリポリで生れた女性です。彼女が 16 歳だった 1967 年、イスラエルで起きた第三次中東戦争を受けて、トリポリの暴徒がリビアに残るユダヤ人殺害を計画しました。のちに私の妻となるこの女性は、幸運にも家族とともに生き残りました。一家は 3 週間身を隠したのち、無事リビア国外に連れ出してもらえました。またしても私は「この家族が何をしたのか」と自問

“AJC はユダヤ人の状況が世界全体の情勢と結びついていることを理解しており、その最大の政策的優先課題は米国の国際主義を推進し続けることです。”

しました。けれど私は、もうひとつの事実も知りました。ある勇敢なイスラム教徒が、自分の命を危険にさらして一家を 3 週間かくまってくれたのです。この勇気あるイスラム教徒が、私の妻と家族をユダヤ人としてだけでなく同じ人間として見てくれたからこそ、彼らは助かり米国に移住することができたのです。

この 3 人から、私は 3 つのことを学びました。第一に、決して悪を見くびってはいけないこと。第二に、米国は自由と希望の地だったこと。第三に、人をひとくくりの集団としてとらえないこと。誰もが一人ひとり違う人間であり、強大な悪をなす人がいる一方で、自分の命を顧みず善をなす人もいます。

そのため私は仕事の中で、「どうすれば毎日善をなせるか」と自分に問いかけています。私は政治科学、国際関係、外国語の学位をとって AJC に仕事を見つけました。AJC に魅力を感じたのは、ユダヤ人が世界の総人口の 0.2% しかいない中で、AJC がユダヤ人としての声を届け、利益を守り、私たちの理念を推進するために活動していたからです。何より重要な点として、AJC はユダヤ人の状況が世界全体の情勢と結びついていることを理解しています。私は 1979 年に AJC に加わり、1990 年に理事長に就任しました。多くの課題と機会が



あり、私たちの責務はそれらの課題に立ち向かうだけでなく、機会を見極めつかむことです。AJCは全くもって無党派の団体であり、団体としての最大の政策的優先課題は米国の国際主義を推進し続けることです。昔から国際主義と孤立主義が周期的に繰り返されていますが、米国が退いて内向きになり、世界の権力構造に真空ができれば、最終的には米国が国際社会に復帰せざるを得なくなり、それにはたいいていの場合一層多額のコストがかかります。

グローバル化する世界における 米国の指導的役割とイスラエルとの関係

そのため AJC のひとつの課題は、米国を世界で指導的役割につかせることです。国際社会での私たちの行動は、米国の軍事力、意志、コミットメントが外交政策にどう反映されるかに左右されます。私たちのイスラエルとの関係は、この両者の「特別な関係」に対する米国の展望とアプローチにかかっています。アジアや特に日本との関係にも、同様のことが言えるでしょう。

21世紀に入り、日本は域内大国の動きを含め様々な新たな課題に対処しなくてはなりません。中国は力を誇示し、政治、戦略、文化面でどこまで勢力を拡大できるか試しています。同じくロシアも、自国の力を見せつけようとしています。こうした要因や、イスラム過激派が国境を越えた脅威となっている事実を踏まえ、米国の強力なリーダーシップを求める声がかつてなく高まっていると思います。

他方で一部の米国人から、「なぜ我々なのか」という疑問が出るのももっともです。対処すべき国内問題



“国際社会が直面する課題への対処は、私たちが担う共同の責任です。”

もたくさんあります。私自身は色々な面で賛同できませんが、一定の視点に立てばこれも正当な評価です。AJCは米国がパートナーと協力すれば、どの国が単独で行動する場合よりも強い力を発揮できると信じています。国際社会が直面する課題への対処は、私たちが担う共同の責任です。これは全員の問題だと私たちは考えています。

これに関し、米国とイスラエルの関係、および AJC の役割について少し話したいと思います。AJC はよくロビー団体と呼ばれます。一部の国ではこの言葉に悪いイメージがありますが、米国ではあらゆる団体がロビー活動を行っており、憲法も政府に請願する権利を認めています。ヒトラーが1933年に権力を握った後、最終的にはユダヤ人の人権が奪われるまでの過程はまるで転落の坂道をたどるようで、誰も助けようとしませんでした。ですから、私がユダヤ人としてイスラエルを論じる際には、非常に大きな意味があり、ユダヤ人国家がなくなればユダヤ人がどんな結末を迎えるかを意識しています。AJCの目標は、民主主義に根差す相互の価値観に基づき、米国とイスラエルの関係が独自かつ特別なものであり続け、イスラエルが中東の重要な地域パートナーとしての役割を維持するよう保証することです。中東には無数の複雑な問題があり、米国が中東の平和に関与しなければ、中東の問題が米国の安全保障に影響を及ぼすでしょう。9.11同時多発テロのような事件が再び起こるくらいなら、我々が中東に出向く方がはるかにましです。

“米イスラエル関係を越えた私たちの真の目標は、ひとことではげばヘブライ語のシャローム、アラビア語のサラーム、つまり平和です。”

米国とイスラエルの信頼関係は、共通の民主主義的価値観と相互の国益への理解に根差すものです。AJCは、イスラエルの民主主義は時に混乱を伴うものの、成熟した民主主義だという姿勢をとっています。米イスラエル関係を越えた私たちの真の目標は、ひとことではげばヘブライ語のシャローム、アラビア語のサラーム、つまり平和です。究極の目標は、イスラエルの国力と安全保障の確保を通じて、域内平和を達成することです。こうした問題に、単純化した慣例的見方で対応するのは非常に容易なことですが、他方でユダヤ系アメリカ人として、知的な謙虚さを見せる必要もあります。

中東地域における平和の実現は、長く険しい道になるでしょう。数年前チュニジアで「アラブの春」が始まったとき、多くの人とはとても楽観的でした。しかしイスラエルと米国は、厳しい現実に直面しています。チュニジア以外の国では、「アラブの春」が深く凍てつく「アラブの冬」になってしまいました。リビア、シリア、イエメン、イラクといった国々が崩壊しています。米国には選択肢があります。平和構築に貢献するか、退いて見守るかです。しかしイスラエルは退くことができません。従って米国のリーダーシップとイスラエルの安全保障を確保するために、米国とイスラエルが結束することが極めて大切なのです。ひいてはいつの日か「神の思し召し」（アラビア語で「インシャラー」、ヘブライ語で「ハレヴァイ」、英語で「God willing」）で、平和がもたらされるでしょう。その日まで、AJCはできる限り賢明に最大限の努力を続けていきます。

モデレーターとの質疑応答

ユダヤ人の価値観と米国人の価値観

杉田: 力強いスピーチをありがとうございました。一般にユダヤ系の方は高い教育を受け、政治に強い関心を持っており、実際、米国では選挙でユダヤ系有権者の投票率が非常に高いです。ユダヤ人がこれほど大きな影響力をもつ理由は何だと思えますか。また、ユダヤ人の価値観には、自由、人権、差別撤廃、人間は「神のかたちとして」創られたなどの考え方があります。

こうした価値観がどれくらい強く意識され、それが米国内にどれくらい保たれていますか。

ハリス: 私の価値観の多くはユダヤの伝統に由来しますが、その多くがアメリカ人の価値観の一部になっていることを誇らしくも思います。例えば米国独立の象徴である、フィラデルフィアの「自由の鐘」を見て下さい。この新たな国の宣言として18世紀に「自由の鐘」にどんな文字が刻印されたでしょう。「全地上とそこに





住む者すべてに自由を宣言せよ」。これはヘブライ語聖書（注・旧約聖書の意）からの引用です。建国の父は、米国の中心を成す価値観としてヘブライ語聖書の道徳的・倫理的な教えを選んだのです。またニューヨークの国連本部ビルの向かいにある大きな壁には、「国は国に向かいて剣を上げず、もはや戦いのことを学ばざるべし」というユダヤの預言者イザヤの言葉が刻まれています。これは平和への普遍的なメッセージを意味します。この2つの例から、ユダヤ人が米国の価値体系におそらく最も画期的といえる貢献をしていることが分かります。

ヘブライ語では「ベツェレム・エロヒム (b'tzelem elohim)」といいます。これは「神のかたちとして」という意味で、人間は全て神のかたちを真似て創られたことを指します。そのためシナゴグには、神の姿を飾ってありません。絵や彫像にすると、人間性の重要な部分が抜け落ちてしまうからです。もし神の似姿が男性であれば、女性はどうなるのか。肌が白ければ、それ以外の肌の色の人はどうなるのか。背が高ければ、高くない人はどうなるのか、といった具合です。

私たちは皆、神のかたちとして創られています。自由と平和は数千年前から探し求められてきました。ユダヤ教、仏教、神道、イスラム教、キリスト教、不可知論、無神論などあらゆる宗教の目標は、数千年を経た今も単に平和を築き、自由と平等を守ることです。これは私がユダヤ教から得た普遍的な価値体系であり、私に言わせれば、米国を含めすべての国と社会に当てはめられるものです。

不安定な中東への対応

杉田：現代の国際政治情勢に話を移したいと思います。まずイラン核合意についてうかがいます。この合意は世界秩序に好影響と悪影響のいずれを与えるのでしょうか。中東にはイスラム国や昨今のシリア情勢など、多くの不安定化要因があります。これを受けて、米国、イスラエル、日本はどんな形で中東地域の安定に寄与できると思いますか。

ハリス：最初のイラン核合意については、私たちは3週間の検討を経てこの合意を支持できないとの結論に至りました。言葉による履行の約束は重要ですが、それだけでは不十分です。他方で制裁は効果をあげました。日本も欧州も制裁実施は困難でしたが、実行しました。これが最善の道だと思います。誰も希望は抱きたいものです。希望はまっとうな感情ですが、国際関係における政策ではありません。イラン核合意は政策立案者側の単なる希望的観測にすぎないと私たちは判断しました。

二つ目の中東の安定への貢献に関する質問ですが、どんな問題も各国の国境の範囲内、あるいは域内にとどまるものではありません。シリアの難民によって、欧州が今抱えている問題を見て下さい。現在、シリアにはイランが進出していて、イスラム国が存在します。トルコ、カタール、サウジアラビア、誰もがシリアに関係しています。ですから私たちは、中東の安定に対して、先頭に立って導くか祈るしかありません。私としては、祈るより導きたいものです。

「ユダヤ系アメリカ人からみた アメリカの政治・社会・大統領選挙」

- 講 師： デヴィッド・ハリス氏 AJC 理事長
- 日 時： 2015年10月21日（水曜日）18時00分～19時30分
- 会 場： 東京大学本郷キャンパス 法学部3号館8階会議室
- 主催・共催： 国際交流基金日米センター（CGP）
米国ユダヤ人協会（AJC）
アメリカ政治研究会
東京大学ビジネスロー・比較法政研究センター
東京大学久保文明研究室
- 主催者挨拶： 西川洋一（東京大学大学院法学政治学研究科科長・法学部長）
茶野純一（国際交流基金日米センター所長）

モデレーター：久保 文明（東京大学大学院法学政治学研究科教授）



アメリカ政治、アメリカ政治史専攻。法学博士（東京大学）。東京大学法学部を卒業し、同学部助手、筑波大学・慶應義塾大学を経て2003年より現職。日本国際問題研究所および東京財団の客員／上席研究員も兼ねる。コーネル大学、ジョーンズホプキンス大学、ジョージタウン大学、メリーランド大学、パリ政治学院、ウッドローウィルソン国際学術研究センターでも研究に従事してきた。著書に『ニューディールとアメリカ民主政』『現代アメリカ政治と公共利益』『アメリカ政治・新版』『オバマ・アメリカ・世界』『アジア回帰するアメリカ』『アメリカ政治を支えるもの—政治的インフラストラクチャーの研究』『アメリカにとって同盟とはなにか』など。内閣総理大臣私的懇談会「首相公選を考える懇談会」委員（2001-02）、朝日新聞書評委員（2008-11）、日米文化教育交流会議（CULCON）委員、アメリカ学会副会長（2010-14）、フルブライト委員会委員、「宇宙政策委員会安全保障部会」委員なども務める。



西川洋一（東京大学大学院法学政治学研究科科長・法学部長）



東京大学講演会場

デヴィッド・ハリス氏の講演要旨

米国ユダヤ人協会（AJC）とは —マイノリティの権利擁護の先駆者



ハリス：こんばんは。ここ東京に私たちを招いて下さった国際交流基金、および今日丁重に迎えて下さった東京大学の西川教授、久保教授に心より感謝申し上げます。

米国ユダヤ人協会（AJC）は1906年に、当時たったひとつの理由から設立されました。それはユダヤ人、特に東欧のユダヤ人が、繰り返し帝政ロシアの攻撃的にされていたからです。ユダヤ人には頼るあてもなく、守ってくれる相手もいませんでした。そこで、主にドイツ出身の米国在住ユダヤ人グループが、ユダヤ系政治団体を試験的に立ち上げ、他に防御手段がないユダヤ人の擁護に米国政府の支援を仰ぐため、協会の結成を決意しました。

1911年には、AJCは全てのマイノリティの権利を擁護するようになっていました。実際、マーティン・ルーサー・キング牧師はAJCの事務所で講演を行い「あえて声をあげてくれる者がほとんどいなかった時代、AJCは、当時ユダヤ人以上に社会的に疎外されていたアフリカ系・ヒスパニック系アメリカ人のため発言してくれた」と述べています。

日系アメリカ人とAJCに関しても、全てのマイノリティは互いに頼り合っているとの理解が基調にあります。フランクリン・D・ルーズベルト大統領は1942年、今となっては悪名高い大統領令を公布し、西海岸の数多くの日系アメリカ人が米国中部の収容所に送られました。1988年、ロナルド・レーガン大統領が任期最後の年ようやく日系アメリカ人コミュニティへの謝罪と賠償を行う法律を制定しました。私は、AJCがこの謝罪を実現するため、主に日系アメリカ人市民同盟（JACL）などの団体を通じて組織化された日系アメリカ人の仲間たちと長年ともに戦った唯一の非日系アメリカ人団体であることを、誇らしく思います。私たちは、

“つまるところ、私たちの権利の最大の守り手は、民主的なルール—法の支配や民主主義的多元主義—の中で法制化された権利なのです。”

ユダヤ人の運命をそれ以外の人々と切り離すことはできないと考えています。

つまるところ、私たちの権利の最大の守り手は、民主的なルール—法の支配や民主主義的多元主義—の中で法制化された権利なのです。少し個人的な話をすると、私の両親は第二次大戦で国を追われ、米国に迎え入れられました。私の両親や、さらに言えば他の大勢の親たちを通じて、私の胸の中に、米国の運命と安寧はユダヤ人に深く関わる問題だという発想が根付きました。米国ほどユダヤ人を守ってくれた国はないからです。だからこそユダヤ系アメリカ人は、米国の政治に積極的に参加しているのです。

ユダヤ系アメリカ人と選挙

正式な統計データはありませんが、現在米国には600～700万人（人口の約2%）のユダヤ系アメリカ人がいます。ユダヤ系人口は他の民族集団ほど急速に増加していないため、割合は減少しつつあります。にもかかわらず、ユダヤ系アメリカ人は選挙で声を伝えています。これには、大きく3つの特徴があると言えます。第一に、ユダヤ人は偶然にもニューヨーク、カリフォルニア、





オハイオなど選挙結果を左右するほど多くの議席数をもつ州に住んでいます。これにより、ユダヤ人の票の重みが増幅されます。もうひとつの特徴として、わが家を含めどの家でも両親が幼い頃から子どもに、雨や雪が降ろうが疲れていても病気でも、投票に行けと教えられています。とにかく投票するのです。そのため、投票率が比較的低い他の民族集団と比べユダヤ人の投票参加は際立っています。米国人全員が投票に意欲的なわけではありません。大統領選挙でさえ、米国の選挙投票率は自慢できるものではありません。

ユダヤ人の第三の特徴として、民主党に投票する傾向があります。実際、1932年以降に民主党の大統領候補でユダヤ人票の過半数を獲得できなかった候補者は、ジミー・カーターだけでした。1980年の米国大統領選挙でカーターが得たのはユダヤ人票の約45%でした。それ以外の選挙では、ユダヤ人の88～90%が民主党の候補者に投票したこともあります。

皆さんに率直に申し上げますと、AJCは無党派団体で、というも、法的にも体質的にも、AJCのような組織は特定候補者の支持または不支持を禁じられているからです。政治活動家としての私の目標は、共和党・民主党両方にユダヤ人票を求めて戦わせることです。衝動や直観、イデオロギーに基づき人々は一定の投票行動をとりがちかもしれませんが、AJCはひとつの政党が当然のようにユダヤ人票を集める状況を望んでいません。どちらの党にも、ユダヤ人票を獲得可能だと考え、そのために何をすべきか自問してほしいのです。

政治家の間では、ユダヤ系アメリカ人は単一の論点に焦点を絞ったコミュニティだと思われがちです。そ

“ユダヤ系アメリカ人は単一の論点に焦点を絞ったコミュニティだと思われがちですが、そうではありません。ユダヤ系アメリカ人コミュニティは複数の論点をはらんだコミュニティなのです。”

うではありません。ユダヤ系アメリカ人コミュニティは複数の論点をはらんでおり、世論調査もそれを示しています。AJCはユダヤ系アメリカ人に関する年次調査を行っており、前年との比較や長期推移を追った実際の長期的数値を知りたいければ、AJCのウェブサイトからデータを取得できます。この調査では、大統領候補、米イスラエル関係、パレスチナとの和平実現への展望に対するユダヤ系アメリカ人の見方を含め、国内外の課題を扱っています。

ユダヤ系アメリカ人とイスラエル

一部のユダヤ系アメリカ人にとってイスラエルは論点でない、と知って驚く方もいるかもしれません。ユダヤ系アメリカ人は、経済政策・環境政策、社会政策、国家安全保障政策その他の幅広い問題に関心を抱いています。私からのアドバイスとして、候補者の方々には、ユダヤ人の行事やシナゴグに出かけてユダヤ系コミュニティを支援し、イスラエルのみを支持する発言をすればユダヤ人票を集められると思いきわ過ちは、犯さないでほしいものです。ユダヤ系アメリカ人も、他の全てのアメリカ人と同じです—税金を払い、希望や不安を抱えています。それらに向き合わねば、彼らはよそへ行ってしまおうでしょう。

ではユダヤ系アメリカ人にとって、イスラエルの役割は何なのか。大半の人は、候補者が米イスラエル関係の重要性を理解しているという安心感を求めています。1980年の選挙で私たちは様々な問題点を感じました。ジミー・カーターはエジプト・イスラエル和平条約の実現という偉業を成し遂げノーベル賞を受けましたが、それでも、イスラエルについてとなると、多くのユダヤ人の信頼を得られませんでした。

米イスラエル関係がなぜそれほど重要なのかと、いぶかる人もいるかもしれません。多くの皆さんがご存知のように、過去には「陰謀」をめぐる誤った疑惑が

いくつも生じています。実際には、大部分のユダヤ系アメリカ人が宗教や政治など様々な理由でイスラエルに親近感を持ち、イスラエルが信頼できる同盟国であるが故に、米国は親イスラエル国家なのです。私たちには発言力があり、それを利用しています。けれど私たちが何らかの形で米国政治を操っていると考えるのは、大きな間違いです。

グローバル化する世界における米国の役割

2016年の大統領選挙に簡単に触れます。2016年には、あらゆる政治がローカルであると同時にグローバルなものになると思います。実生活の中で次第に両者を切り分けられなくなっているからです。例えばテロは、国境を越えた現象です。貿易、雇用といった問題も国境を越えた現象です。最近のギリシャ破綻から学んだように、こうした問題をひとつの都市、ひとつの国家、ひとつの地域のみ限定することはできません。昔ならほとんどの米国人が、ギリシャ問題に退屈してあくびしたでしょう。他方で今は、ギリシャ問題が米国にも重要であることは明らかです。さらにはギリシャで起きていることは、日本にも重要です。米国の有権者も、こうした運命や幸福、繁栄、安全保障における相互依存性の高まりに次第に気づきつつあります。今後、国家安全保障と外交政策は米国の有権者にとって非常に大きな課題になると考えられます。



“日本は、強大な能力と意志をもって国際的に関与する強い米国を必要としています。”

ちなみにここは日本なので、従来の通念に反する新たな調査結果が出たことに、皆さん興味を持たれるかもしれません。従来、米国はラテン系移民の国になるうとしていると考えられていましたが、今後数年以内に米国ではアジア系移民がラテン系を上回り、国内最大の外国生まれの人口はラテンアメリカ系でなくアジア系になることが分かりました。これは日本にも大きく影響するでしょう。このように相互依存と多文化主義が高まる傾向から示唆されるメッセージを、共和党は受け止めていません。共和党はこれまで、こうした問題に無関心な有権者層にアピールしてきました。しかし急激に変化する社会・政治的環境で存在意義を保つため、共和党は順応する必要があるでしょう。

私は25年以上日本と親しくつきあってきました。近いうちにすぐには解決しないだろうと思われる多くの新たな課題を抱えるアジア太平洋地域、特に中国の台頭などにおいて、日本は、強大な能力と意志をもって国際的に関与する強い米国を必要としています。米国の持続的な関心が、欠かせません。しかし今日の世界では残念ながら、米国の持続的関心がしばしば得られないのが実情です。

もし私が日本に住んでいれば——そうできればとよく思います——米国の大統領が米国の国際的な義務やコミットメントを理解しているか、また武力を無責任で軽率な形でなく、されど躊躇せずに行使する自信があるか知りたいでしょう。ここ数年米国の意志とコミットメントに疑問が生じているため、こうした点を確認したいと思うでしょう。これまで当然視されてきた一定の力学が、将来的に必ずしも当たり前でなくなるかもしれません。その一例は、米国のTPPへのコミットメントをめぐる不透明さです。AJCはTPPを支持しTPP推進は米国や日本を含む海外パートナーにとって経済面・安全保障面で利益になると信じています。しかし民主党が次第に左傾化する中、TPPが推進されるか不透明です。

他方でテロの犠牲となる反面、イラクやアフガニス

タンへの侵攻の結果も目の当たりにした米国人の間には、一種の矛盾した感情が見られます。行動を容易に予測できない勢力から自分の身を守らねばと感じる一方、過剰な反応をしてもいけません。私たちは、両立

させたいのです。米国の行動は単に米国やユダヤ人だけでなく、東アジアを含む世界と米国との関係に大きく影響するでしょう。

モデレーターとの質疑応答

キリスト教福音派のイスラエル支持に対する反応

久保: 米国ではここ数十年間に、イスラエルを支持するキリスト教福音派団体が数多く出現しています。過去にあったキリスト教徒とユダヤ人の対立の歴史が変わりつつあります。これは、キリスト教徒とユダヤ人の関係性の変化を意味するものですか。

ハリス: はい、米国は50年間この変化の先駆けとなってきましたが、他国でも同様の傾向が見られます。米国でこの変化が起きた最大の理由のひとつは、キリスト教徒とユダヤ人との結婚が大幅に増えたことです。

キリスト教福音派に関する久保先生の質問により具体的に答えると、これが興味深い動向であることは認めます。しかし福音派の信徒数はほぼ頭打ちで、若い信徒は両親世代の政治的パターンを踏襲していません。例えば彼らは、環境や移民などリベラルな問題に関心を持っています。

イスラエル問題に関して、多くのユダヤ人が福音派の支持を歓迎する一方、一部には不安感も生れていま



す。一部の人は、福音派の支持は共通の民主主義的価値観でなく、キリスト教の終末論に根差すものだと感じているからです。キリスト教福音派の目的は、自分たちを改宗させることにあるのではと懸念するユダヤ人もいます。私としては、本人に改宗する心積もりがない限り安全だと思います。私たちは福音派の支持を歓迎すべきです。

“The U.S., Middle East, and the World: An American Jewish Perspective”

- **Lecturer:** David Harris, Executive Director of AJC
- **Date & Time:** Monday, October 19, 2015 16:40-18:15
- **Venue:** Doshisha Chapel, Imadegawa Campus, Doshisha University
- **Organized by:** The Japan Foundation Center for Global Partnership (CGP)
American Jewish Committee (AJC)
Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religion,
Doshisha University (CISMOR)
International Institute of American Studies, Doshisha University
- **Co-Organized by:** School of Theology, Doshisha University
- **Opening Remarks:** Koji Murata (President, Doshisha University), Junya Shinohe (Director, Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions (CISMOR), Doshisha University), Junichi Chano (Executive Director, The Japan Foundation Center for Global Partnership)

Moderator: Hiroki Sugita (Managing Senior Writer, Kyodo News)



Sugita is currently Managing Senior Writer at Kyodo News. He joined Kyodo in 1980 after graduation from Hitotsubashi University and served as Tehran Bureau Chief (1991-92), New York Correspondent (1993-96), Washington Correspondent (1997-2001), Washington Bureau Chief (2005-09), and Senior Feature Writer and Editorial Writer (2010-13). He frequently interviewed global leaders including Presidents Vladimir Putin of Russian federation (twice) and George W. Bush of the US. His current career also includes Planning Committee Member, Japan National Press Club; Special Fellow at Institute of Asia-Pacific Studies, Waseda University; Visiting Fellow at Institute for Policy and Cultural Studies, Chuo University; and Fellow at Institute for Okinawan Studies, Hosei University.

He is the author of “Kensho Hikaku no Sentaku” (Reviewing Japan’s decision to pursue non-nuclear weapon state) (Tokyo: Iwanami Shoten, 2005); “Samayoeru Nihon” (Drifting Japan) (Tokyo: Seisansei Shuppan, 2008); “Amerika wa Naze Kawarunoka” (Why can the United States change? – reviewing the U.S. presidential election in 2008) (Tokyo: Chikuma Shobo, 2009); “Sekai ga Nihon no Koto wo Kangaeteiru” (The World is watching Japan – writing about interviews with nineteen world intellectuals on the earthquake-tsunami-nuclear accidents on March 11, 2011) (Tokyo: Taro Jiro sha, 2012).



Koji Murata (President, Doshisha University)



Prof. Junya Shinohe presents a memorial card to Mr. Harris

Summary of Mr. David Harris's Lecture

Jewish History and AJC's Missions

Harris: Good afternoon. It is a great honor for me to be here at Doshisha University. I want to thank President Murata for his warm hospitality, and everyone at the Japan Foundation for partnering with us at the AJC.

I am here today on behalf of the AJC because of three people. The first is my father, who moved to Berlin with his parents. He was there in 1933 at age 13 when Adolf Hitler became Chancellor. From then until the end of the war, he was a refugee in Austria, then France, then a soldier in the French foreign legion, and then he spent three years working in coal mines at a Nazi Vichy camp. He escaped, and spent the last two years of the war with OSS, the precursor to the CIA, which brought him to the U.S. after the war. My father rarely spoke about his own story, but I asked the question, "What had my father done that was so wrong that led to these 12 years of persecution, fear, imprisonment, escape, and courage?" And of course the answer was that my father was Jewish.

I am also here because of a woman born in 1923 in Moscow. By 1929, she and her family were among the last legal refugees from Stalin's rule; and like many, they arrived in Paris where they joined many other refugees. They lived there comfortably until 1940 when the Nazis occupied and invaded most of France. Like many, they then left Paris and headed south, and spent the next 17 months trying to hide and escape the Nazis and their Vichy collaborators who were looking for the Jews. And for the second time I asked myself the question, "What is it about human nature that can target, persecute, and potentially kill these people simply for the fact that they were born Jews?"

The third person who brought me here is a woman who was born in 1951 in Tripoli, Libya. In 1967, when this young woman was 16 years old, as a result of the Six-Day War in Israel, mobs in Tripoli decided to kill the remaining Jews in Libya. This young woman, my future wife, and her family

were among the very lucky ones. They hid for three weeks and eventually they were escorted safely out of Libya. Once again, I asked myself, "What had this family done?" But I learnt something else: one brave Muslim rescued them and hid them for three weeks at risk to his own life, and because of that brave Muslim who didn't see my future wife and her family as Jews alone but as human beings, they were saved and came to the U.S.

I have learnt three things from these three people. First, to never underestimate evil. Second, that the U.S. was the land of freedom and hope. And third, to never think of people in groups alone. Everyone is an individual, and just as there are those who have the capacity to do great evil, so there are those with the courage to risk their own lives to do good.

The U.S. Global Leadership Role and its Relationship with Israel

Therefore, professionally I ask myself, "How can I do good every day?" I took my degrees in political science, international relations and foreign languages, and found work at the AJC. I was drawn to the AJC because it works to raise our voice as a Jewish people, defend our interests, and advance our cause in a world where one fifth of one percent of the population is Jewish. And most critically, the AJC understands that the condition of the Jewish people is linked to the condition of the larger world. I joined in 1979 and by 1990, I became CEO. There are many challenges and



“AJC understands that the condition of the Jewish people is linked to the condition of the larger world, and our highest policy priority is to continue promoting American internationalism.”

opportunities, and our responsibility is not only confronting the challenges but defining, identifying, and seizing the opportunities. The AJC is strictly non-partisan, and our highest policy priority is to continue promoting American internationalism. The cyclical waves of internationalism and isolationism are an old and ongoing story, but an America that retreats, and looks inward, allows vacuums to be created in the power structure of the world, and ultimately requires America to return and usually at higher costs.

Therefore, one challenge for us involves the U.S. global leadership role. Everything we do globally depends on the projection of power, will, and commitment by the United States. Our relationship to Israel is dependent on the outlook and approach of the United States towards that “special relationship.” Our relationship to Asia, and to Japan in particular, has many similar elements.

Moving into the 21st Century, there are a variety of new challenges that Japan must address involving the movements of regional powers. China is flexing its muscles, and testing how far it may be able to push politically, strategically and culturally. Likewise, Russia is seeking to assert its own power.



“We believe that tackling the issues facing the international community is our shared responsibility.”

With these factors, and the fact that radical Islamic forces represent a transnational threat, we believe that the need for strong American leadership is greater than ever.

However, some Americans ask the understandable question, “Why us?” There are many domestic issues to address as well. Although I disagree in many ways, from certain perspectives this is a fair assessment. At AJC, we believe that the strength of America working alongside our partners is stronger than any one nation working alone. We believe that tackling the issues facing the international community is our shared responsibility. We take the view that we are all in this together.

In this respect, I would like to say a few words about the U.S.-Israel relationship, and the AJC’s role. We are often referred to as a lobby group. In some countries, this word has negative connotations, but in the U.S., every group lobbies, and the constitution refers to the right to petition the government. After Hitler came to power in 1933, it was a “slippery slope” in that the final solution was a gradual process of taking the human rights of Jews away, and people being reluctant to help. So when I, as a Jew, discuss Israel, there is a much bigger meaning, and I am reminded of what the consequences are for Jews when there is no Jewish state. The AJC’s goal is to ensure that the

“Our real goal beyond the U.S.-Israel relationship is one word: shalom; salaam, peace.”

U.S. relationship with Israel remains unique and special, and that Israel maintains its role as a key regional partner in the Middle East, with mutual values rooted in democracy. The issues in the Middle East are myriad and complex: If America doesn't go to the Middle East, the Middle East will come to America. We are much better off going there, rather than having another 9/11.

Our belief in the U.S.-Israel relationship is rooted in common democratic values, and an understanding of mutual national interests. At AJC, our position is that while Israel can sometimes be a messy democracy, it is a matured democracy, and our real goal beyond the U.S.-Israel relationship is one word: shalom; salaam, peace. Through ensuring Israel's strength and security, our ultimate goal is to achieve regional peace. On the other

hand, however, as American Jews, it is important to demonstrate intellectual modesty. It is very easy to approach these problems from a prescriptive, simplistic perspective.

Achieving peace in the region will be a long and difficult road. When the story of the Arab Spring began in Tunisia a few years ago you will remember, many people were very optimistic. However, Israel and the United States face a stark reality. Aside from Tunisia, the Arab Spring has turned into the deep freeze of the Arab Winter. From Libya to Syria, from Yemen to Iraq; nations are disintegrating. The U.S. has a choice. We can contribute to peace-building, or we can pull back, watch and wait. But Israel cannot pull back. Therefore, keeping the United States and Israel together is extremely important to us, both to ensure American leadership, to ensure Israel's security, and ultimately one day as they say in Arabic "inshallah", in Hebrew "halevai," in English, "God willing," there will be peace. And until that day at AJC we will continue to work as hard and as smartly as we possibly can.

Questions from the Moderator

Jewish Values and American Values

Sugita: Thank you very much for your powerful speech. In general, persons of Jewish heritage are highly educated, and have a strong interest in politics – in fact, the turnout of Jewish voters in U.S. elections is very high. Why do you think

Jewish people have so much influence? The values of the Jewish faith include liberty, human rights, the elimination of discrimination, and humans being made "in the image of God." How strong is the awareness of these values, and how closely are they being kept in the U.S.?





Harris: I draw many of my values from the Jewish tradition, but I am also very proud that many of those values have become part of American values. For example, if you visit the Liberty Bell in Philadelphia, the symbol of American independence, what are the words that were inscribed on the Liberty Bell in the 18th century to give voice to this new country? ‘Proclaim liberty unto the land and all the inhabitants thereof.’ Those words come from the Hebrew Bible. America’s founding fathers chose the moral and ethical teachings of the Hebrew Bible as their central values. Also, if you look across the street from the United Nations building in New York, you will see a big wall with the inscription of the words of the Jewish prophet Isaiah, ‘a nation shall not lift up sword against nation, nor shall they learn war anymore.’ These words are meant as a universal message of peace. These two examples point to what I would argue to be perhaps the most revolutionary contribution of the Jewish people to our value structure.

In Hebrew, we say “b'tzelem elohim.” In English, those words mean “in the image of God.” This refers to the fact that all of us are created in the image of God. Therefore if you visit a synagogue, you will never see an image of God, because if you saw a painting or a sculpture by definition that would exclude a major portion of humanity. If it is a man, what about woman? If it is white skin, what about people of other skins colors? If the person is tall, what about people who are not tall? And so on.

We are all created in the image of God. Liberty and peace have been the search for thousands of

years. The whole goal of every religion, whether Jewish, Buddhist, Shinto, Muslim, Christian, agnostic, or atheist, is simply to, after thousands of years, create peace, protect liberty, and defend equality. This is the universal value structure that I take from the Jewish religion, which to me has applications in every country and every society, including the United States.

Responses to Destabilization in the Middle East

Sugita: I would like to turn the conversation to the current state of global politics. First, I would like to ask you about the Iran nuclear deal. Will this have a positive or negative effect on the world order? Also, there are a number of destabilizing factors in the Middle East from the Islamic State to the current situation in Syria. In response to this, how do you think the U.S., Israel, and Japan can contribute to stability in the region?

Harris: Regarding your first question, on the Iran deal, we reviewed it for three weeks, and reached the conclusion we could not support it. Words are important but they are insufficient. On the other hand, the sanctions worked. They were difficult for Japan to implement, but you did. They were difficult for Europe to implement but they did. I believe this is the best path. We wanted to be hopeful, but while hope is a legitimate sentiment, it is not an international relations policy. In our judgement, the Iran deal was simply wishful thinking on the part of policymakers.

Regarding your second question, about contributing to the stability of the Middle East, no problem is contained within the borders of each country, or the region as a whole. Look at Europe’s challenge today because of the Syrian refugee situation. Iran is now in Syria. Islamic State is in Syria. Turkey, Qatar, Saudi Arabia, and everyone has a stake in Syria. So either we lead or we pray. I would rather lead than pray.

“Politics, Society, and Presidential Campaign in the U.S.: An American Jewish Perspective”

- **Lecturer:** David Harris, Executive Director of AJC
- **Date & Time:** Wednesday, October 21, 2015 18:00-19:30
- **Venue:** Conference Room , 8th Floor, Faculty of Law Building No.3,
Hongo Campus, The University of Tokyo
- **Organized by:** The Japan Foundation Center for Global Partnership (CGP)
American Jewish Committee (AJC)
Study Group in American Politics
Institute of Business Law and Comparative Law & Politics (IBC),
Graduate Schools for Law and Politics, The University of Tokyo
The office of Dr. Fumiaki Kubo, Faculty of Law, The University of Tokyo
- **Opening Remarks:** Yoichi Nishikawa (Dean, Graduate Schools for Law and Politics,
The University of Tokyo), Junichi Chano (Executive Director,
The Japan Foundation Center for Global Partnership)

Moderator: Fumiaki Kubo

(A. Barton Hepburn Professor of American Government and History at the Graduate Schools for Law and Politics, the University of Tokyo)



Dr. Kubo has been in his current position at the University of Tokyo since 2003. He is affiliated with the Japan Institute for International Affairs as a Visiting Scholar, as well as with the Tokyo Foundation as a Senior Research Scholar. He studied at Cornell University in 1984-1986, at the Johns Hopkins University in 1991-1993, and at Georgetown University and the University of Maryland in 1998-99. In addition, he was an Invited Professor at SciencesPo in Paris in the spring of 2009, and a Japan Scholar at the Woodrow Wilson International Center for Scholars in 2014. He is the author of many books which include: *Modern American Politics* (with Hitoshi Abe), *Ideology and Foreign Policy After Iraq in the United States* (editor), *A Study on the Infrastructure of American Politics* (editor). In 1989, he received the Sakurada-Kai Gold Award for the Study of Politics and the Keio Gijuku Award.

In 2001 and 2002, Kubo served on the Prime Minister’s Commission on the Study of Direct Election System of Prime Minister. Since 2007, Kubo is a member of the U.S-Japan Conference on Cultural and Educational Interchange (CULCON). In February 2015, he became a member of the Japan-US Educational Commission.



Yoichi Nishikawa (Dean, Graduate Schools for Law and Politics, The University of Tokyo)



Public lecture at the University of Tokyo

Summary of Mr. David Harris's Lecture

AJC as a Defender of the Rights of All Minorities



Harris: Good evening. I am very grateful for the Japan Foundation for hosting us here in Tokyo, as well as to Professor Nishikawa and Professor Kubo of the University of Tokyo for their gracious welcome here this afternoon.

The AJC was founded in 1906, initially for one simple reason: Jews, particularly in Eastern Europe, were targets of repeated attacks sponsored by Tsarist Russia. They had no recourse, no source of protection. Because of this, a group of Jews in the United States, mostly of German origin, resolved to form a committee in order to “experiment” in Jewish political organization, and to enlist the help of the U.S. Government in defending Jews who otherwise had no defense.

By 1911, AJC was defending the rights of all minorities. In fact, at a lecture at an AJC office, Martin Luther King Jr. said, “When few dared to speak, AJC spoke out on behalf of black Americans and Hispanic Americans who were even more socially marginalized than Jews at the time.”

Speaking of Japanese-Americans and AJC, and reflecting the understanding that all minorities depend on one another, in 1942, President Franklin D. Roosevelt issued his now infamous executive order, which removed tens of thousands of Japanese Americans from the West Coast and interned them in camps in the middle of America. It was not until 1988 that President Ronald Reagan in his last full year in office signed legislation which offered an apology and redress to the Japanese-American community. I am proud to say that AJC was the one non-Japanese American organization that had fought for years with our Japanese-American

“Ultimately the best protector of our rights is the rights enshrined in democratic rule—in the rule of law, in democratic pluralism.”

friends, organized principally in the Japanese-American Citizens League and similar groups, to achieve that result. We understand that Jews cannot separate our destiny from others.

Ultimately the best protector of our rights is the rights enshrined in democratic rule – in the rule of law, in democratic pluralism. To speak personally for a moment, both my father and mother were displaced by the conflicts of World War II, and were welcomed to the U.S. My parents, and I daresay the parents of many others, instilled in me the notion that Jews have a profound stake in the wellbeing and destiny of the United States of America, as it is a country which has protected the Jews unlike any other. This is why American Jews are committed to participating in American politics.

American Jews and Elections

Although there are no formal census numbers, it is estimated that there are 6-7 million American Jews today, or approximately 2% of the American population. The Jewish population is not growing as fast as some other demographics, so that percentage is actually slipping. Despite this





“One myth is that American Jews are a single-issue community. Wrong. American Jews are a multi-issue community.”

fact, American Jews make their voices heard in American elections. There are three major characteristics in Jews’ involvement in elections: The first is that Jews happen to settle in States which tend to have enough electoral seats to decide elections – states such as New York, California, Ohio, and so forth. Immediately, the importance of the Jewish vote is magnified. Another key characteristic is that mothers and fathers like mine taught me from day one that whether it rains or snows, whether you are tired or ill, you get out and vote. It is as simple as that, you vote. For this reason, the commitment of Jews to voting stands out among other groups which have a proportionally smaller turnout of voters. Not all Americans share that commitment to voting. Voter turnout in American elections, even Presidential elections, is not something to brag about.

Jews have the third characteristic: they tend to vote Democratic. In fact, since 1932, only one Democratic Presidential candidate failed to get a majority of the Jewish vote: Jimmy Carter in 1980, who received about 45% of the Jewish vote. On the other occasions, Jews have voted as high as 88 to 90% for Democrats.

Now, I want to be completely candid with you. We are nonpartisans at AJC, because by law

and by temperament, organizations like ours are forbidden from either endorsing or opposing any candidate for office. As a political activist, my goal is to make both political parties fight for the Jewish vote. By impulse, instinct, or ideology, people may tend to vote in a certain way, but at the AJC, we do not want one political party to take the Jewish vote for granted. We want both parties believing that our votes are obtainable, and therefore, asking themselves what they must do to win them.

One myth that I think politicians are susceptible to is that American Jews are a single-issue community. Wrong. American Jews are a multi-issue community, and all of the polling data shows it. AJC actually does an annual survey on American Jews if you wish to see actual, longitudinal numbers, comparing year to year to year over a span of time, you can visit our website and retrieve the data, which covers domestic and global issues, including how American Jews view Presidential candidates, U.S.-Israel relations, prospects for peace with Palestine and so on.

American Jews and Israel

It may surprise some of you to know that for some American Jews, Israel is a non-issue. American Jews are interested in economic policy and environmental policy, in social policy, in national security policy and a whole host of other issues. Our advice to candidates is not to make the mistake of patronizing the Jewish community by going to a Jewish event or a synagogue and thinking that if you speak supportively of Israel and Israel alone, you are going to get the vote. American Jews are like all Americans - they pay taxes, and they have hopes and fears. If you don’t address them, they may go elsewhere.

What is then the role of Israel for American Jews? Most want a satisfaction that the candidate understands the importance of U.S.-Israel relationship. We saw problems in 1980 because even though Jimmy Carter achieved the Israel-Egypt peace treaty, a remarkable achievement, for which the Nobel Prize was awarded, he was not trusted by many Jews when it came to Israel.

Some may be suspicious of why the U.S.-

Israel relationship is so important. As many of you know, there have been many spurious allegations of “conspiracies” in the past. However, the truth is that the U.S. is a pro-Israel country because the majority of American Jews identify with Israel for a whole host of reasons: religious and political reasons, and the fact that they are reliable allies. We have a voice and we use it, but the notion that we somehow manipulate American politics is a big mistake.

The U.S. Role in the Globalized World

I would like to briefly touch on the 2016 election. I believe that in 2016, all politics will be local and global at the same time. This is because, increasingly, you cannot separate these two poles in real life. Terrorism, for example, is a transnational phenomenon. Trade, jobs, and all of these things are transnational phenomena. You can't localize it to a city or a state or a region as we learnt from the near collapse of Greece, for instance. Years ago, most Americans would have yawned about this issue. Now, on the other hand, it is clear that what happens in Greece matters in the U.S. By extension, what happens in Greece matters in Tokyo. So this growing interdependence of fate, wellbeing, prosperity, and security is increasingly becoming known to American voters. I believe the national security and foreign policy are going to be very big issues for American voters in the years to come.



“I believe that Japan needs a strong, internationally engaged U.S. with strong capacity and will.”

Parenthetically, since we are here in Japan, I think you might find it interesting that a new study has just come out, which defies conventional wisdom. Conventional wisdom had it that we are becoming an increasingly Latino country, but we have learned that within a few years, Asian migrants to the United States will exceed Latino migrants, making the largest foreign-born population in the United States, Asian, not from Latin American. I believe this will have significant consequences for Japan. These increasing trends of interdependence and multiculturalism point to a message that the Republican Party is not receiving. Their strategy in the past has been to appeal to the voter demographic who yawns at these issues, but I believe they will need to adapt to remain relevant in this rapidly evolving social and political landscape.

I have been a friend of Japan for 25 years or more. I believe that Japan needs a strong, internationally engaged U.S. with strong capacity and will, especially in the Asia-Pacific region where there are many emerging challenges that will not go away anytime soon, such as the rise of China. The sustained attention of the U.S. is crucial. However, in today's world, attention-deficit disorder is unfortunately more often the diagnosis than sustained attention.

If I were living in Japan – and I wish I were on many days – I would want to know that the U.S. President understands the international commitments and obligations of the United States, is confident in using power not irresponsibly, not lightly, but nonetheless not in a hesitant manner. I would want to be sure of that because in recent years there have been questions about America's commitment and will. Therefore, certain dynamics that have been taken for granted in the past may not necessarily be able to be taken for granted in the future. One example of this is the uncertainty about

America's commitment to the TPP. We at AJC support it, and believe it is in both the economic and security interest of the United States and our global partners, including Japan, for the TPP to move forward. However, with the Democratic Party increasingly tending to the left, the advancement of the TPP is unclear.

On the other hand, I think that among the American people, who have been victims of terrorism, but also who have seen the consequences

of entry into Iraq and Afghanistan, there is a kind of schizophrenic feeling. There is a feeling that we must protect ourselves from forces whose actions we cannot easily predict. At the same time though, we must not go too far. We want it both ways. The actions of the U.S. will have important consequences for not just America, not just for the Jews, but for U.S. relationships the world over, including East Asia.

Questions from the Moderator

Jewish Responses to Evangelical Christian Support for Israel

Kubo: In America over the past decades, a number of evangelical Christian groups who support Israel have emerged. In the past, there has been a history of conflict between Christians and Jews, but this has been changing. Does this mark an evolution in the relationship between Christians and Jews?

Harris: Yes, and the U.S. has been at the vanguard of this change over the past fifty years, but there are similar trends in other countries too. In the U.S., one of the major reasons for this is that intermarriage between Christians and Jews has increased significantly.

To address your question about evangelical Christians more specifically, I agree that this is an interesting development. However, I believe that the numbers of evangelical Christians have more or less plateaued, and younger evangelical Christians are not following the political patterns of their parents. For example, they are more interested in liberal issues like the environment and immigration.



On the issue of Israel, many Jews welcome evangelical Christian support, while it creates a sense of unease for others because they feel the basis of their support is not rooted in shared democratic values, but in Christian eschatology. Some Jews worry the goal of evangelical Christians is to convert them. My answer to this is that if you are not ready to be converted then you are safe. We should welcome evangelical Christian support.

国際交流基金日米センター

日米が共同で世界に貢献し、緊密な日米関係を築くことを目的として、1991年に国際交流基金に設立されました。両国のパートナーシップ推進のための知的交流と両国の相互理解を含めるための地域・草の根交流の2分野で交流事業を行っています。

<http://www.jpf.go.jp/cgp/>

The Japan Foundation Center for Global Partnership

The Center for Global Partnership (CGP) was established within the Japan Foundation in 1991 to promote collaboration between the people of Japan, the U.S., and beyond in order to address issues of global concern. CGP organizes or provides funding for collaborative projects to strengthen the global U.S.-Japan partnership and to cultivate next generation of public intellectuals to sustain this partnership.

<http://www.jpf.go.jp/cgp/e/>



国際交流基金日米センター

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-16-3

TEL: 03-5369-6072 FAX: 03-5369-6042

URL: <http://www.jpf.go.jp/cgp/>

2016年10月発行 / 無料 ©2016 国際交流基金日米センター

Printed in Japan

無断転載、複写を禁じます。